

きびのこころ

NO.12
月刊

昭和三十四年六月一日発行 (非売品)
発行所 岡山県都窪郡吉備町庭瀬七〇七
〒垣方 吉備親光協会

第四輯 戦争蓋 第三号

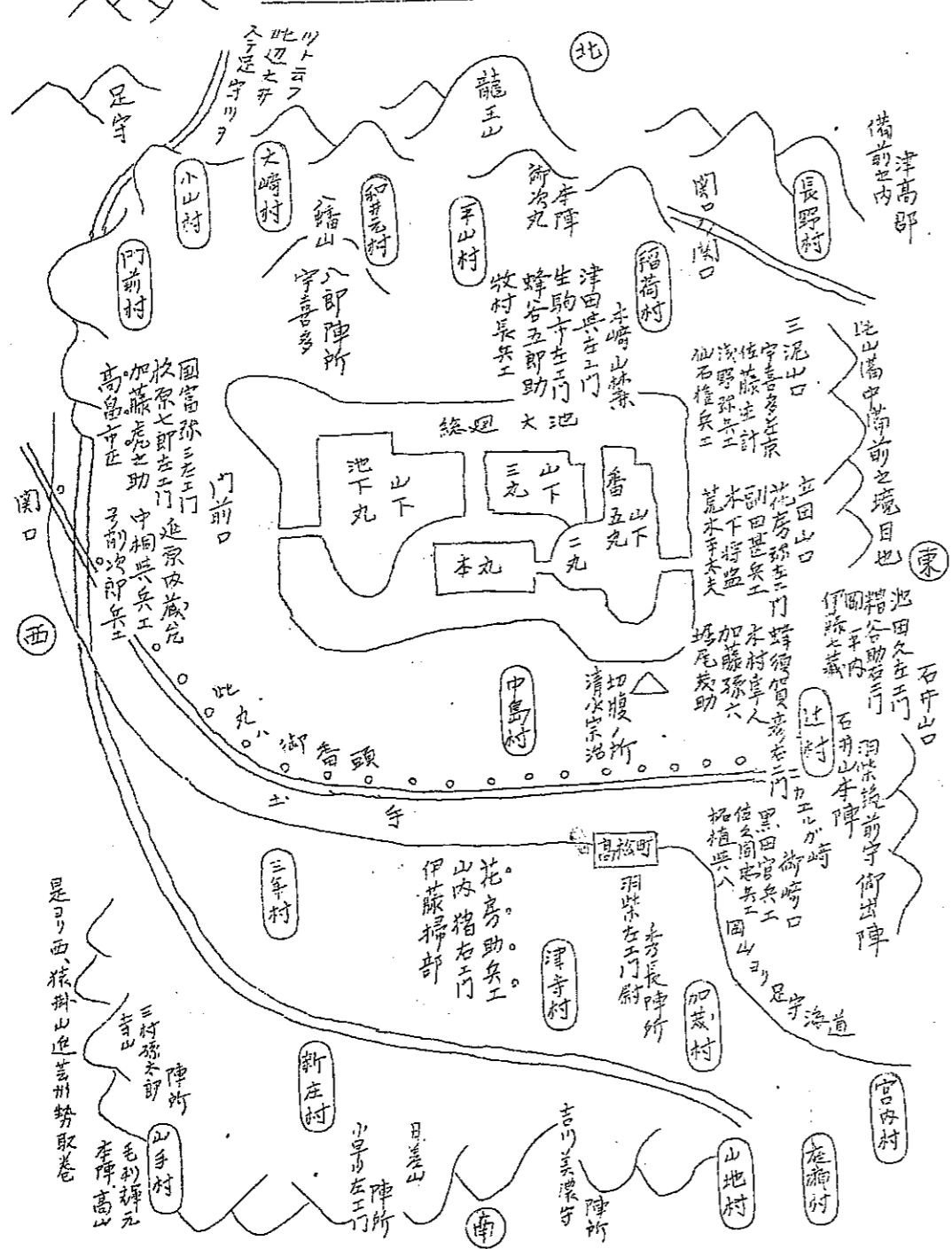
○高松城水攻の合戦 (その二)

前号のあとに、(秀吉は高松城の陥落を期して攻勢を排除した。門前村の河口から怒涛の如く、瀧流が
谷をこめて低地に降りて奔流し、高松城をのこして一面瀧海の様相を呈した)。

これより秀吉は戦況の推移を考慮し、立尾・徳田・信長に應援軍の派遣を
要請していたが、毛利軍として早くもそのことを探知し、信長の大本営が東
播磨に、高梁川の線まで後退し、神宮を撃つ計画であった。毛利軍は下城兵
数千の生命を眼前にして、みずく鬼殺にするに忍びない。なにとなく
信長の到着までには、無を放せんと焦意し、再三夜襲の戦術を行って築堤
破壊の策を講じた。巡察警備は厳しく容易にその目的を達するに至らな
った。偶々戦の最中に末軍に一時の押退、その臣明智光秀の在りしに、此れ
軍使が秀吉の陣へもたらされたことである。秀吉は書を讀み、此れは意外
に驚き、毛利方に決まることを恐れ、急いで安国寺の僧惠瓊を呼び、寄せ一
両月中に講和を承諾するならば、城を清水水長に、門前村を北に、寄せ一
全部を釈放する。という条件を提案した。惠瓊は城中に赴いて、その旨を宗
治に告げた。宗治はここに至っては、徒らに糧食を損傷せしめるだけ、
なく、永く國家の安危にむかひることである。潔く降参を乞ひ、自決して、
城の警備を結んだのである。

六月三日宗治は籠城の甚しき敵に笑はれ、存亡の間に髪を結び、鬚を剃
り、身を清め、又城中の糧食末を詳細に記録し、備後の三原にある長子源三
郎に遺言を残したためた。翌四日秀吉より檢地・瀧邊の旨を受け、己の刻(至助九時)

高松城水攻羽柴軍包圍之圖 古圖による



に兄の月清入道、本近左衛門尉信實その家臣難波傳兵衛、高寺之元小者の
七郎二郎及び共十郎の主従七人ともにも小舟に乗り、秀吉の本陣石井山へ
向つて漕ぎだした。この時刻頃には秀吉の軍からも堀尾恭助を横北役として
柳掃一荷、折一箱を載せてやつてきた。これと途中に出合ひ恭助は酒肴を
宗治等に贈つて籠城の辛苦を慰めた。宗治はその好意を謝し舟中で最後の
酒宴が催された。石井山の本陣はもとより敵味方とも凝視のうちには宗治は
立ち上り静かに誓願寺の曲を舞ひおさめ
浮世をば 今こは渡れ武士の 名を高松のこけに疎して
の絆を遺れ従容として切腹した。時に年四十六歳、家臣の高寺之元が介
針した。續いて兄の月清入道も
世の中に おしまるる時散りてこそ 花も花なれ色も色なれ
の一首を口吟して切腹した。本近、難波以下の勇士もみなこれに殉じた。
のである。茂助はその首級を各々用意の首楯に納めて秀吉の實腹に供した。
秀吉は撫然として宗治こそ古今の武士の魁傑である。と賞揚したという。
(宗治の死は石井山持室院(眞言宗)にて供養を営み、首は同寺境内に埋葬されたが、明治四十二年二月
に高松町の繁榮房右エ門がこれを発掘して高松城九跡に移し、新たに石塔を立てたのである。其石塔の上部
が破壊し、石塔が傾いたので小塚に移し、もとの墓は自宅に保存していた。昭和三十一年十月に首塚を永久に保存
するため発掘調査したるに、記録による宗治の切腹に使用した懐剣は見當らな、ただ無数の骨片と宗治が切
腹直前に酒を飲んだ茶碗の酒杯の破損したもののみであったのみ。これをガラス細器に入れて密封を施し、和氣氏に保
存の骨殖を復元してそれにガラス細器を入れて二重につくったコンクリート室に安置したのである。そして宗治十代
目の孫清水忠俊を招いて鎮魂祭を執行し、宗治の冥福を祈つたのである。)

四三

れたが、剛勇のものを籠城中も忠節を守つていた。六月三日本丸の主君宗
治に使を送つて仔細があるのでも面会したといふ、宗治を招いた。宗治が行く
と共三左衛門は御切腹は明日と約束して、定めし秀吉の検視があること
と思ふ。拙者が先きに切腹して御覽に入れよう。といつて、腹を一文字に
掻切つた。忠義な士であるから宗治は自裁後妻子の行末をこの共三右衛門
へ頼む所存であつたので残念に思ひ介錯を乞ふまゝ、に宗治は流をのんで首
を刎ね本丸へ立去つたといふ。
かくて両軍の和議は成立し戦雲は収まり、伯耆の矢橋川、備中の川辺川(高
高梁川)を堺として以来東を領有した。そして宇喜多秀家に九万石を共へ、高
松城は秋原七郎左衛門尉家次を城代に差置いた。
史蹟としては高松城址、宗治の自刃の場所、秀吉の本陣地、蛭ヶ鼻(長
堤を築き始めた所)今切(和隆后長堤の一部を切り開き湯水を四方に泥濘
せしめた所)などが遺つてゐる。
次に庭瀬城の勤静であるが、戦記によれば七ヶ城の防禦陣地は悉く落城
して高松城のみが孤立したかに書いてゐるが、庭瀬城は周囲に泥濘を築き
にむめぐらうし南は一面に海浜にして地の利を占めてゐるので攻撃には非常
に困難な地形であつたので、東軍は右翼軍から行動を起し諸城砦を漸々侵
襲してゆけば、この庭瀬城は自然孤立無援の状態に陥り、千本を交へたし
て退却か、或は自滅せざるを得ない窮地に追ひ込まれる立場になつたのであ
る。そこで東軍は高松城の包圍戦に主力を傾注したのである。幸ひに高松
城落城の和議がなつたので庭瀬城としてはこの本格的な戦闘も行は
れず、小競合の程度にて無傷のまま、終戦になつたのである。
(當時庭瀬城といふは今の撫川城(御本陣)を指したものである)。

○

高松城水攻策戦計画についての考察

秀吉が文軍を率いて大坂藩中堀に迫り、先づ冠山、宮路山の両城を攻落し、リッリで加勢城を煮つて高松城の包圍攻撃に取りかかつたのである。東軍が何故に北方の山岳地帯を突破し藩中路に向つて進撃の態勢をとらなかつたのであろうか。常識的に考へればその行動は容易であり、且つ南方に布陣してゐる毛利軍に脅威を與へ戦局を有利に展開することになるのである。しかもこの高松城の一角にこの山にこたわり、全力をここに集注して水攻といふ持久戦に移つた處に秀吉の智謀が窺はれるのである。

當時毛利軍は中國の大津を領有し、兵力は十万といはれ悔りたない勢力に阻まれて高松城を包圍戦にクギ付けせられ、兵は十万といはれ悔りたない。状態に思ふに、田信長は其の性格は短氣にして猜疑心の深い持主である。もし秀吉が獨力で中國を征服すれば將來如何なる野望を抱くかも知れない。油断のなからぬ奴だと思はれ禍の及ぶことを考へ、一山城である高松城の水攻めに日時を費しここに毛利軍を牽制して信長の急援を求め、その指揮に従ふ方針をとつたのである。

此の援軍として命令を受けたのが明智老秀、筒井順慶、長岡忠興、池田輝高、高山長秀、中川清秀等の諸將である。しるに信長は不幸にして京都本能寺に宿營中、明智老秀の反逆に遭ひ、悲惨な最期をとげたのである。

大和橋記の一節に
 信長晩年に至り老秀を猜疑し、その領地を召し上げ中國征伐を命じた。老秀は中國征伐と稱し兵一万五千を率ひ一敵は本能寺に在りし。と下知し、信長の宿せる本能寺を十重、二十重に取圍んだ。信長只ならぬ人馬の響に

六五

かバと赤を起き蒲丸居らぬみ、疾く物見せよ。と命ずれば、畏まりました。と椽に出てほのぼのとしむ空に、小手を翳して眺むれば、桔梗の絞の旗標、急が老秀の反逆と見受けられます。信長はなに日向とな、一矢報ひて腹切らう。防が者共と自ら敵敵名を射籠し、最早二れまで自害せんと、奥に入りたる處へ明智方の三羽雅の一人、安田作兵衛、障子に映る信長の影を見りや、跳りかゝらん其の刹那、森蘭丸長柄の槍をしごき、鉄壁も通れと突出す。鋭き槍先に一突はは兵衛危しとみたが、却つて武運拙なく討ち取らぬ、衆寡敵せず信長以下皆自取した。

この悲報は早馬をもつて高松の秀吉の本陣へもたらされた。秀吉は大いに驚き、

(一) 織田父子の死を毛利方に傳へて壹々々々交戦すべきか
 (二) 細して早急に和を結ぶ所い合戦をなすべきか
 (三) 前者をとれば毛利方を相手として最後まで戦へば勝利を得ることには至難ではない。しかも明智老秀は毛利方と同盟し必が前後から挟撃してくるに相違ない。戦果不利に導くことは論を俟たない。そこで後者を

△

織田信長の布令戦

秀吉は構和成立后主君の仇敵明智老秀を誅戮せんと、毛利軍の鉄砲組の一部隊を先登に電着石火のやうに京師の地へ飛んだ。老秀は秀吉が毛利方の苦戦中なるその行動の早業に慄して一万六千の守兵を率ひて根津山城の境で京都へ入る要地、八幡、山崎へ出陣したが一文字に三星の視じりなき風に靡せて進撃してくる毛利軍の加勢を見大いに驚き、遠巡する違もな

この合戦に老秀と盟約のあつた大和の大名筒井順慶は洞ヶ峠で日和見をきめこんでいたが、形勢不利とみて退却してしまつた。老秀は從者数名に擁せられて坂本城の根拠地へ走る途中、土民のために殺れた。

老秀が兵を擧げて十三日目である。

大和栞記の一節に（老秀落す近き條に）

一騎当千の即黨十數名を従へ、小栗栖へとさしかかつた時（小栗栖は松見尾により天正の約す五軒）立湯原（西栗）で夜にその午前三時頃）三々伍々と密かにさぼ降る雨の中を進み、竹藪の横を通らんとした時、横あみから土民が狙ひ定め、エ、いと突き出す槍は老秀の腸腹深くグツと刺した。無私者ツ」とい、つ竹槍を切り落し、突き刺れたまゝ、馬を走らせ、凡先三十丁も来た頃、流石の老秀も遂に落馬したが、續いて来た瀧尾茂朝この有様を見て驚き、抱き起すと、「この深傷では最早坂本迄も覺束ない、命自害致す故、汝介錯致し呉れ」と五十五歳を一期として儂なき最期を遂げた

嗚呼天の配深か、此れにも宿命か、悲愴な末路である。

（老秀は通稱を十兵衛といひ、岐氏の末葉で、和歌や連歌などに通じ、文武両全の人、信長に仕へてみう京都の行政や若狭、越前の手定にも功勞があり、惟任（これとての稱子）といふ、日向守に任ぜられた。主君に謀反し

た勤熾は天正七年（一五七九）丹波の上城を攻落した時、母親を入質にして城將を降して安土城へ送つた所、信長はこれに殺し、又老秀の母親をも殺されたので、世人から老秀方は母親殺しのつれりを受け、老秀は生來猛狹の性質であつた。所へ母親が信長の手によく、夫ははれから、神皇正統記となり、たく信長の仕うちに遺恨を抱くようになった。偏中園出兵の機会に來じて、領地丹波から兵三万を率いて、夜裏松本能寺を襲撃したのである。時に信長の從臣は僅かに百人に足らず、拒むようもなく、信長は自殺した。二十四九歳であつた。天下一統を遂げにみながら疾風の如く京都に覇を擧げたが、その乱も亦老秀のようになつて消え去つたのである。

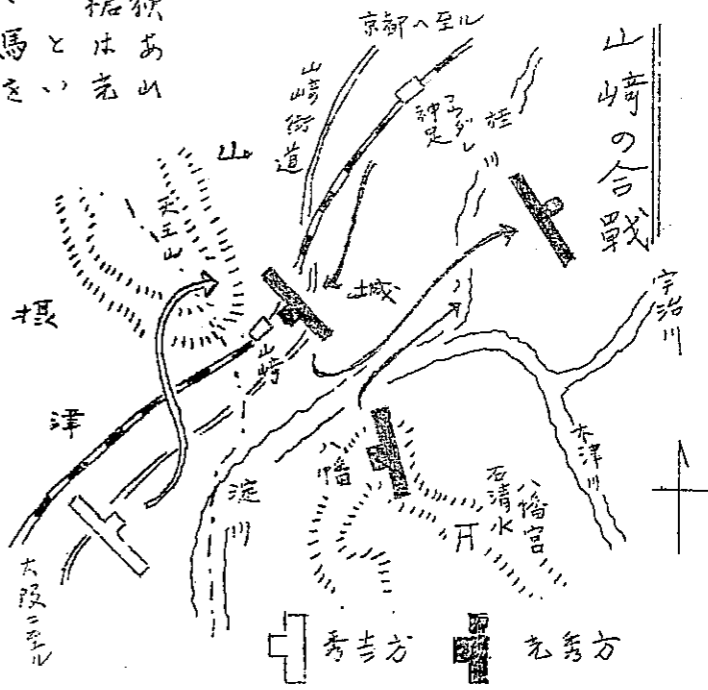
神崎與五郎のあづま下りに「なきは勤思するが勤思」といふたか、勤思の経にも限度がある。信長に反逆を企てた老秀に、つては後世の人は悪人のまことに傳へてゐるが、果しこそう考へても、もうみ、私は疑問を持つのである。）

媾和直後に紀州の雜質から織田父子の自殺したことを毛利方に傳へて来た。輝元はこれに喜び、これを機に直ちに秀吉の軍を追撃すべしと主張したが、元春、隆景は誓約を破るは義にあらず、表に來することは武士の道ではない、と、つて制止せよ、安芸に歸陣したという。秀吉が天下統一してから輝元、隆景は五七老に列せられたのである。

○ 松山城の合戦

松山城、主三村信隆、親は多年の仇敵岡山城主宇喜多直家を滅さんとしたが、毛利氏は三村の命を却けて宇喜多氏と盟約を堅く結んだので、元親は父然織田信長の援助を仰がねばならぬ立場になつた。

偶天正二年（一五七四）の冬、信長は使者を遣はして元親のもとへ味方すべき旨を報して来たので、元親は一族從類を松山城中に合して去就について評定した。しみるに元親の叔父に當る成羽城主三村孫兵衛親成、その子孫太郎親宣はこれに反対し、その不可なることを諫止したが、元親は聞き容れず、却つて孫兵衛父子を迫害せんとしたので、親成は十月七日夜に乘じて松山を退き安



其の毛利氏に通じた。又宇喜多氏も使者を毛利氏に送つて三村氏は阿波の
 三好氏に志を通じ信長と盟約せよ由を告げた。毛利氏は愈々親を攻撃する
 ことに決し十一月月上旬八万余の大軍を動員して笠岡に上陸し、親成を當内
 彼として偏中に進撃した。先づ猿掛城を襲つて入城しここに本營を置き松
 山城の属城有漢、竹莊、先倉、野田、野山の諸城を攻落し、ついで荒
 平山、大渡、孝山城など相結んで陥れた。敗將は全部退いて松山城に立籠
 り最後の攻防戦に移った。この松山城は高梁市街の東に聳ゆる山岳郭に
 して天障の要害、攻防数旬に亘つたが容易に攻落することゝ出来なかつた。
 偶城中の竹井宗左衛門直定、河原六郎左衛門等が毛利氏に内應し遂に天神
 丸の一郭を奪り取り毛利勢を引かした。尾豊右衛門、秋三郎兵衛、
 井原内蔵介、報所藤介、南江備前守、神崎豊前守、山本左馬助、佐藤右馬
 亮、石田某等相ついで軍門に下り、小松山の孝丸に逃れたものは吉良常陸
 介、神原六郎左衛門、蓋雪といふ盲人等僅かに数人である。
 天神丸の陥落によつて大松山丸にも反忠者が續出し、多年恩顧の即従も
 俄かに生命を惜んで一人去り二人逃げ残るものは僅かに五十人に過ぎず。
 元親はこれまでなりと宗統二十余人と共に自決せんとした。石川源左衛門
 久成の諫言によつて再興を計らんと六月一日の真夜中城を脱出し従者数名
 と高梁川を渡り阿部山の中に入り陥れたが捕へられず松蓮寺に自害した。そ
 の子勝法師丸は伊賀三左衛門久隆に捕へられず井山(結社寺)に斬首せられ
 た。

十一月九日三利軍が笠岡に上陸して軍事行動を始め、みづら翌三年六月一
 日松山城陥落まで実に七ヶ月に亘る大激戦であつた。

松蓮寺に安置の元親の位牌に

一瞬源樹大居士 天正三年六月二日
 とあり。

毛利、三村両軍諸城配置図



六月物故者

嘉永元年六月廿五日 板倉頼清守勝成(藩主)
 明治廿一年六月一日 森田月瀬(学者)六十三歳
 明治三十五年六月十日 岡勝造(重富道家)七十一歳
 昭和廿三年六月一日 岩田半山(彫刻家)六十二歳
 (おはり)

① 鮮魚 ② 氷卸小賣
魚進 岸本商店
 本店 吉備町 西花尻 電話 一三〇ノ乙
 支店 本町

書籍 雑誌 文房具
日黒郁文堂
 都窪郡吉備町庭瀬
 電話 219番

全書六十冊 吉備町庭瀬 電話 219番